



「大学の「機能分化」状況における専門教育と教養教育との創造的再構成」プロジェクト

インタビューシリーズ第17回：文学部 谷口洋先生

谷口先生のご専門は、中国語・中国文学。特に古代の口承文芸と文献資料との関係がご研究のテーマだそうです。昨年度の文学部の教育研究年報に学部長裁量経費プロジェクトの報告として谷口先生が書かれたものが巧まらずして秀逸な教養論になっていたのを読んで、このインタビューシリーズとしても、ぜひお話を伺いたいと考えました。



■ 外国語を学ぶことの意味

——まず、外国語を学ぶことの意味、というところからお話を伺いたいのですが。

「私が教育について語っていることは、自分の大学人としてのキャリアから来ていることが大きいです。最初は京都産業大学の中国語の教員として採用されました。当時、私たちの研究分野では語学教師が最大の就職口でした。全部、初級中国語で、翌年からは非常勤も頼まれたので10コマぐらい。徐々に国文学科から漢文の授業を頼まれたり、外国語学部の専門科目を頼まれたりして、語学のコマは減りましたが、かなり持っていました。奈良女に来てからも、教養部がありませんから、文学部の教員であっても語学の授業をずっと持たなければならぬ。語学教育と縁を切ることはできません。

外国語教育について言うならば、戦前の旧制高校の場合は英独仏語、どれをとっても学問を吸収するための必須のツールとして学んだわけです。ところが面白いことに、授業自体はむしろ教養主義の内容でした。今の方がよほどスキルをトレーニングする。教師もインストラクターであることを求められる状況なんですね。私が教壇に立った1995年の段階では、何のために語学をやるのか、という意味は相当希薄化していました。学生に訊くと、一番多い理由は「旅行に行きたい」でした。バブルが弾けてしばらくたっていましたが、まだ若い者は海外に行くもんだ、という雰囲気がありましたね。中国は近いですから、こっちもけしかけたりしていました。「沖縄より安く行けるから行ってこい」とか、「大学に4年いる間に、一遍ぐらい外の空気を吸ってこい」とか。最初は、旅行したいとか、個人的な、ある意味イージーな動機から学生は何となく海外に憧れて外国語を履修するわけですが、しかし一度現地に行く、海外に行くことは、若い人には貴重な経験になりますよね。そうやって何年

か学生たちと付き合ってみて、外国語を学ぶことは、単に何かを学ぶツールではなくて、外国を知る、外国に行く、外国というものを見てみることで自分が大きい意味をもつ、今という時代に一般教養になり得るんだと感じました。特に中国、韓国の場合は、今、どんどん向こうからも来ているわけですから。」

「前任校で印象的だった授業があります。京都産業大学ではインドネシア語を第二外国語として履修することができました。そういう大学はほとんどないんじゃないかと思いますが、その担当者が熱心な方で、いつもクラスがパンクして抽選になる人気授業でした。最初、学生はインドネシアを知らない。世界地図でインドネシアの場所を確かめることから始める。ビデオを使って、どんな国で、どんな歴史があつて、というレクチャーをやりながら語学学習を進めて行く。インドネシアという国を知ってもらうために語学の授業をフルに活用しているんですね。なるほど、そういうことなんだと思いました。こういう時代になったら、日本だけでは世界は動いてないことは明白で、逃れようのない事実です。そのことを知るのが、大学で外国語を学ぶ大きな意味になってきているのではないかと、それが本来の意味での「教養」と重なってきている、そういうものになりつつある、と位置づけることができるのではないかと感じています。」

■ 中国の「近代」を学ぶ困難

——いわば教養としての異文化体験、異文化学習、そしてその契機としての外国語学習というお話、よくわかりました。他方、中国語を学ぶことは歴史とも深い結びつきがありますね。その観点は如何でしょうか。

「そこは難しいところがあります。中国にかかわって一番感じるのは、今の日本における中国像が明らかに

分裂しているということです。今の中国、リアルタイムの中国というのは、一方では学生の旅行先であったり、最近では芸能界の交流が盛んですよ。音楽でも映画でも。中国の都会の子の服装は渋谷の真似で、そういうポップカルチャーやファッションのレベルでは一緒なんです。もう一つは、ビジネスの対象としての中国。また、しばしば問題になる、政治的に対立する中国。いろいろな中国があって、それらが接点を持たないんですね。それが歴史になると、もっと深刻です。高校の漢文でやるような古典。あるいは厳密な意味での古典とは言えないけど、『水滸伝』や『三国志演義』などの古典小説。そういうものも一定の人気がある。じゃ、近現代の中国文学はどうか。岩波文庫から、かつては同時代中国文学の翻訳があったんですけど、今は魯迅とか老舎とか、超大物の有名作品だけが残って、あとはほとんど絶版になっている。奈良女でも、近現代中国文学は専任がいないので非常勤でやっているんですが、なかなかカバーしきれない。「中国の近代って何なの？」という大きな問題意識を学生に持ってもらうところまで行かない。ましてや古典との葛藤の中で近代が生まれてきたという話は、なかなかしづらいところがあります。私が「中国文学概論」の授業を担当する時は、何がなんでも甲骨文字から魯迅までは行く。間をすっ飛ばすんです。今言ったことを、どうにかしてしゃべりたいからなんですけど。どうしても中国というと、日本が古来受け入れてきた古典文化があって、それと今の中国がなかなかつながらない。中国人が古典との葛藤を経ながら 20 世紀、近代の文化をつくってきたことを、日本にいて理解するのは、理解してもらうのは非常にしんどい。ほんとにね、これは僕もできてないし、日本の中国学全体が考えないといけないと思うんですね。そうやって考えると、中国語の授業でどこまでそこに踏み込めるか。しかも日本では、学生が近代史をやっていないんですね。どうやって限られた時間数の授業の場で、我々が抱かされている問題意識を学生に伝えるかは深刻な問題です。」

■ ツールとしての外国語／教養としての外国語

——教養の中国語の授業で、他学部の学生を担当されることはありますか。

「僕は時間の関係で中級しか担当してないんですが、履修規定（注：理学部や一部の生活環境学部の学科では中国語は卒業要件にならない）や時間割の要因があって、他学部の学生はほとんどいないです。」

——とくに理科系では、語学にツールとしての有効性を求める傾向が強いんですね。

「それは無理もないところがありますけどね。理科系で

国際的なジャーナルに出したり、学会に行ったりする人は、それは切実な問題でしょうから。だからといって、学生が英語でプレゼンできるようにならないか、というようなことを英語の先生に言うのはお門違いだと思います。そういう訓練は専門教育でやればいいわけで。ただ、理系の人の立場に立って考えると、研究をサポートする仕組みが日本では貧弱なんです。外国に行くと、すぐわかります。英語のプレゼンテーションの訓練をしたり、論文を直すとか、研究をサポートするために大学はもっとスタッフをおかないといけない。そういうのがね、中国でも全然違う。これは勝てんわ、と思いますね。向こうは国際交流、留学生担当部署も充実しています。若いスタッフがたくさんいて、基本的にマスター卒で、学位を持っている人もいる。大学教育についてよく理解があって、一家言を持っている人がやるわけですね。そういう人が日本でいえば事務室にいる。日本はそういうところがなくて、全部、教員がやらされる。理系のプレゼンテーションの練習は理系の先生がやるべきだと思うんだけど、確かに実験やっている人が終わった後、プレゼンの練習までやらされるのかと考えると、同情の余地がある。」

——生活環境学部の松岡先生のインタビューでも、同様のことをおっしゃっていました。そこで、あらためて教養教育における外国語の位置づけを考えてみると、一つは、敢えてツールではない外国語をやる、という方向。もう一つは、逆にツールとしての外国語のトレーニングの中で思考が鍛えられる、という方向。その二つが考えられると思うのですが…

「それがなかなか実際には難しく、端的にいうとレベルの問題なんです。どちらにせよ相当のレベルに達する必要があるのに、初修外国語の場合は、そこまで行くまでに終わってしまうのが現実なんですね。ほんとに通文法をやるだけで1年終わっちゃう。」

「さらに、私は語学をやること自体、教養的意味があると本心から思っているのですが、それを方法論としてやろうと考えると、実はダメになっちゃうんですよ。語学の授業で教養的な内容をやろうと考えると、むしろそこからダメになる。虻蜂取らなくなるんですね。中級の教科書になると、中国語の文を読みながら中国の文化を知りましょうという教科書が、うんざりするくらいあるんですが、大体、つまらない。私はまず使わない。で、私は何を使っているかというと、中国の小学校の教科書を教材にアレンジしたのがずいぶん前にあったんです。それを配って、中国の小学生は何を読んでいるか、と。70年代末から80年代のものではないかと思います。時代性もあるけど、中国の教育が垣間見られて面白いんですよ。非常に説教臭いし。国語の教科書でも科学読み物が必ず入るんです。革命の歴史を讃える文章とかも必ず

あります。タテマエとしては語学の授業なので平たい文章を多読する、ということですが、もう一つの目標としては、中国の子どもたちがどんなことを習ってきたのかを知る。それを通じて中国社会のほんの一端でも見てもらう。」

——中国語を教養科目として学ぶということが、大学全体のカリキュラムの中にどのように位置づいたらいいな、と思われるか。

「なかなか難しい問いですね。少なくとも中国語を大学で4単位、8単位やった学生は、反中国にはならないと思うんですね。そういうレベルが、まず最低のラインかな。反中国を言う人たちは、なんか、ちゃんとわかって言っているのかな、ということです。外国に対して何かものを言う時に、多少なりとも、その国が置かれている歴史状況、社会的、経済的状況をわかってからものを言わないと、国際社会でのつきあいにならないと思うんです。これは中国に限らないけど、中国はとにかく、そこが問題になりますから。中国の反日デモだって同じことですが。中国語を学ぶことは、まず相互理解の前提条件ということになるのではないかと思います。」

——中国語を学んだ学生は反中国感情を抱かないだろう、ということではありますが、それが、たとえば韓国に対しても一般化していくことはあり得ると思われますか。

「それは、あると思いますよ。アジアとヨーロッパという大きな括りまで越えていけるか、という問題はあってもいいかもしれませんが、とにかく訴えたいのは、英語だけが外国語じゃないということですね。それからアメリカだけが外国じゃない、と。これをまず言って行かないと。我々第二外国語の人間は、それが今の使命かな、最低限の。グローバル化というのがアメリカ化に過ぎない、ということとはしばしばある。アメリカにくっついていくのが、しばしば国際化として語られている。」

「第二外国語の履修動向も変化します。それも最近は、どんどん表層化するんですね。笑い話があって、バルセロナオリンピックの年に全国的にスペイン語の履修者が激増した。「今からやっても間に合わんぞ」と言ったんですけど。メディアの露出度で決まっちゃうんです。ちょっと前は、ドイツ語はどうしようもなく長期低落傾向で、フランス語より少なくなっていたんですが、ここ数年盛り返しているのはサッカーのおかげなんです。日本の選手がどんどん行っているじゃないですか。ブンデスリーガのおかげですよ。ここは女子大学だから、そこまでじゃないと思うけど。日本社会全体が内向きになっている中で、外国語を学ぶことの意味も、テレビに出ているから、今そこにあるから、という理由になっている。

でも、正直なところ動機はどうでもよくて、来てくれたらこっちのもんだというところがある。そこで「はあ」と思わせたら、こっちの勝ちなんですね。悲観はしていないです。何でもいいから来てくれたら、と。」

■ 大学全体への視点を持つこと

——中文や国文の学生の姿を通して、今の奈良女子大の教養教育については、どのように見ておられますか。

「残念ながら、あまり教養の話をしない。これは学生を責められないと思います。教師がそうだからだと思うけど、えてして大学は、専門に比べて教養を軽く見ていますね。もう一つは、やはり学生は専門をやりたくて入ってくるんですよ。そうすると、教養で何が残っているか、心もとないところがある。国文や中文に来る学生こそ社会科学をしっかりとやってほしいんだけど、そういう科目が乏しい。このまま社会に出して大丈夫かなと思いますよ。たとえば最低限の法律の精神を知っておかないと。就職した時、アルバイトしている時でさえ、最近の労働環境は無茶苦茶ですからね。」

「学生には社会科学と自然科学のある程度のことはやっておいてほしいんですけど、今は体系的にやる体制になっていないですね。大綱化以来、自然科学系、社会科学系、人文科学系で何単位、というのがなくなりましたから、どうでもいい取り方になっている。共通科目が教養科目として機能しているかという、確かに危ういところがありますね。本当は専門と教養の関係は相互補完的な関係なんです。自分の専門はこれだと決めた瞬間に、それ以外も知っておかないと困るということが発生するわけで、そういうところをやらないとマズイと思うんですけども。この専攻の人はこれとこれをやりなさい、ということにならないとおかしいんだけど、そうはなっていない。横並びで、とにかく取りなさい、と。ただ、これも難しい問題で、科目指定をすればいいのかというと、語学の授業で文化のこともやったらどうだ、という話と一緒にね、技術的にやろうとするとうまくいかないですね。」

——他大学ではコアカリキュラムとかで対応していますね。

「そういうことができるのは、それに責任をもつ人がいて、体制があるからです。教養コアカリキュラムの担当者を張りつけている。専門だってギリギリでやっているから、負担を軽減していかないと回らないと思うんですね。何かあると全部均等に割り振る、という発想になるけど、そうすると、末端では何もなくなる。そこは大変だと思いますが。皆、漠然と思っていることはあると思うので、それを実現するチャンスがほしいですね。義務としてやるのではなく、チャンスを回すという発想で

取り組めたらいいですね。」

——万遍なく、というのではなく、プロジェクト的に、できる
ところから意味のある面白いことをやっていったらどうか、と
いうことを目論みではいるのですが…。

「プロジェクト的なやり方は面白そうですね。起爆剤に
なるような気がします。とにかく固定化した一般教養を、
まず払拭するところから始めるという点で。自分の専門
以外にやらないといけないこと、という持っていく方を
するなら、どんどん変わっていかないとウソなので、そ
の意味でもプロジェクト的なものは意味があるのかなと
思います。」

「全体を考える、ということが大学教員全体に最も不足
していると思うんですね。大学教員は専門があって来て
いますから専門を考えるのは当然ですが、同時に大学全
体の視点を持たないと。自分の専門さえやっていけばい
い、という状況に対して、何か仕掛けていかないと、
ということはあるですね。専門が大事だというのはあ
たりまえです。でも、私の専門はこれです、と言った瞬
間に、それ以外が生じますからね。

僕のようなポジションにいと、それを意識せざるを得
ないです。教養の語学と学部専門、その専門の中には
中文ではなく国文の学生に漢文を教える使命もあるん
ですね。一人三役かな。それを1回生からドクターまで
見ないといけない。しんどいけれど、三つやらせてもら
って得をしているのかな、という気はします。そう思って
やらないと、やってられないですから。」

——私も、人生に無駄なことは一つも無い、と自分に言い聞か
せてやっています。

「本当にそうですよ。」

(2012年5月25日、インタビュアー:西村、保田)

シンポジウムのご案内

11月10日に本学で関西教育学会という学会の大会
が開催され、下記のようなシンポジウムを行います。
学会外にも開かれた公開シンポジウムですので、本学
の皆様にも奮ってご参加いただけますよう、ご案内い
たします。

関西教育学会第64回大会 公開シンポジウム

大学の現在

—私たちは日本の高等教育をどうするのか?—

1991年の大学設置基準の大綱化、2004年の国立大学
の独立法人化等を経て、日本の高等教育は「改革」され
るはずでした。しかし、今、多くの大学人が懐いている
のは、「こんなはずではなかった!」という思いではな
いでしょうか。内側では大きく変質した学生への対応
に苦心し、外側からは産業界や行政から大学への要請が
いっそう厳しくなっています。山積する課題に追われる
ばかりで、ゆったりと学生とつきあい、落ち着いて研究
する時間は、もはや皆無。どうすれば大学がよくなるの
か、そのグランドデザインも見失われがちです。

本学会の多くの会員は大学での教育に携わっていま
す。個々の研究テーマが何であれ、自分たちの働く場
である大学をどうするのかは、切実な問題であるはずで
す。また、初等・中等教育に携わる会員も、大学のあり方
に無関心ではあり得ないはずで。周知の通り、日本の初
等・中等教育のあり方は大学教育、とりわけその入学者
選抜に大きく左右されているからです。にもかかわらず、
高まる社会的関心に比べて、大学教育に対する教育学研
究者の関心は、これまで意外に手薄だったのではないで
しょうか。

本学会では2002年の第54回大会で「大学教育改革」
をテーマとした課題研究を開催しています。それから
10年。今年の大会では久々に大学教育を公開シンポジ
ウムのテーマとして取り上げ、大学の現在を教育学研究
の視点から総括し、私たちは日本の高等教育をどうした
らよいのか、その展望を学会内外の方々と議論したいと
考えます。

話題提供: 生田 周二 (奈良教育大学)
鮫島 京一 (奈良女子大学附属中等教育学校)
林 美輝 (龍谷大学)
コメント: 松浦 良充 (慶應義塾大学)
司会 : 西村 拓生 (奈良女子大学)

日時: 2012年11月10日(土) 14時~17時
場所: 奈良女子大学S棟2階 S235大講義室
参加費: 無料

■ 奈良女子大学教育システム研究開発センターニュースレター 26 ■

2012年9月20日発行

奈良女子大学教育システム研究開発センター

住所: 〒630-8506 奈良市北魚屋東町

奈良女子大学コラボレーションセンター 204

TEL: 0742-20-3352

Website: <http://www.nara-wu.ac.jp/crades/>

E-mail: crades@cc.nara-wu.ac.jp